

京都府埋蔵文化財情報

第130号

平成27年度京都府内の埋蔵文化財調査-----	森 正 -----	1
追悼 -----		7
1. 追悼 上田正昭先生 -----	井上満郎 -----	7
2. 前理事長・上田正昭先生の御逝去を悼む -----	小谷昌弘・磯野浩光 -----	10
平成27年度発掘調査略報 -----		13
8. 阿良須遺跡第1次		
9. 平安京跡(平安京左京一条三坊二町)		
10. 美濃山遺跡第4次		
11. 女谷・荒坂横穴群第14次		
12. 下水主遺跡第9次・水主神社東遺跡第7次		
13. 唄田遺跡・砂川古墳		
長岡京跡調査だより・126 -----		20
現地公開状況(平成28年3月～平成28年8月) -----		22
普及啓発事業(平成28年3月～平成28年8月) -----		23
センターの動向(平成28年3月～平成28年8月) -----		27

2016年10月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

平成 27 年度京都府内の埋蔵文化財調査

森 正

平成27年度に当調査研究センターでは、新名神高速道路関係の発掘調査をはじめ、国営亀岡中部農地整備事業に伴う調査など府内各地で12件の発掘調査を実施した。

以下に、府内各地で行われた発掘調査の状況について各市町教育委員会等、他の調査機関の発掘調査を含め地域ごとに概観する。

なお、丹後地域では京丹後市、中丹地域では綾部市、福知山市、南丹地域では亀岡市、乙訓地域では向日市、長岡京市、南山城地域では宇治市、城陽市、八幡市、木津川市の調査成果を取り上げ、文末に各調査組織を記した。

〈丹後地域〉

京丹後市史跡^{あみのちょうしやま}網野銚子山古墳においては、平成27年度から史跡整備事業に先立つ発掘調査が実施されている。今回は、前方部東角付近での調査が行われ、周濠の外端ラインなどが確認された。
(京丹後市教育委員会)

〈中丹地域〉

綾部市^{あおのにし}青野西遺跡では、庄内から布留式併行期にかけての竪穴建物2棟や、過去の調査で確認



写真1 車塚遺跡 3区断ち割り区南壁火山灰検出状況(北から)

されていた前方後方形周溝墓の後方部南西角部などが確認された。(綾部市教育委員会)

福知山市^{いざきじょう}猪崎城跡では、範囲内容確認のための調査が実施された。(福知山市教育委員会)

〈南丹地域〉

亀岡市^{さえき}佐伯遺跡では、古墳時代後期の竪穴建物が13棟みづかり同時期の集落の存在が確認された。また、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物7棟なども確認されており、同時期の集落があったことも判明した。(当調査研究センター)

亀岡市^{みつかいち}三日市遺跡・^{くるまつか}車塚遺跡では、約3万年前に降下した始良T n 火山灰が約20cmの厚さで堆積しており、旧石器時代の古環境は湖沼及び水際の湿原であったと考えられる資料となった。また、^{いずも}出雲遺跡では、弥生時代後期の流路や、平安時代の井戸や柱穴群が確認された。(当調査研究センター)

〈京都市域〉

^{てらまちきゅういき}寺町旧域・^{ほうじょうじ}法成寺跡では、平成26年度に引き続き、府立鴨沂高等学校の校舍改築に伴い調査を実施した。安土桃山時代から江戸時代前期の寺院の墓の遺構を確認し、豊臣秀吉が整備した寺町形成期の寺院の土地利用の在り方がうかがえる資料となった。平安時代中期に藤原道長により建立された法成寺に関する遺構は確認されなかった。(当調査研究センター)

また、古絵図に記載された寺院の敷地堺溝なども確認された。(京都市埋蔵文化財研究所)

^{へいあんきょう}平安京跡(京都守護職^{きょうとしゅごしよく}上屋敷跡)では、幕末の御所警護のため置かれた京都守護職上屋敷に関する建物の礎石据付跡などを検出し、幕末の京都守護職上屋敷跡に関する遺構を確認した初めての事例となった。(当調査研究センター)

^{へいあんきょうさきょうしじょういちほうにちょう}平安京左京四条一坊二町跡では、平成26年度の調査で出土していた9世紀後半の「難波津」の歌が記された木簡の内容が公表された。難波津の歌は『古今和歌集』に手習いの歌として紹介されているもので、「難波津に 咲くやこの花 冬こもり 今は春べと 咲くやこのはな」の全文が記されていた。平仮名の完成期に近い文字で書かれており、仮名の変遷を考える上でも重要な資料となった。(京都市埋蔵文化財研究所)

^{へいあんきょうふらくてん}平安宮豊楽殿跡では、平安宮朝堂院の西側に隣接する豊楽院の正庁である豊楽殿跡基壇の調査が行われ、基壇の版築の様子や礎石根固めのための壺掘地業が確認された。建物の柱間が平城宮第二次大極殿と共通することが確認された。(京都市文化財保護課)

^{へいあんきょうあとしきょうごくおおじ}平安京跡東 京 極大路で行われた調査では、「大路」であるにもかかわらず、その幅が小規模なものであったことが判明した。造営当初は幅7.7m以上であったものが10世紀前半頃には4.5mの幅に縮小されるなど、小路より小規模な道であり京内道路としての重要度が低かったものと考えられる。(京都市埋蔵文化財研究所)

^{えんしょうじ}円勝寺跡・^{じょうしょうじ}成勝寺跡・^{おかざき}岡崎遺跡では、平安時代後期に開発された白河街区において天皇や皇族によって造営された六勝寺のうち、円勝寺と成勝寺の跡地において調査が行われた。調査では、

隣接していた円勝寺と成勝寺の寺域を区切るとみられる溝などの遺構が確認された。また下層からは弥生時代末期の環濠などが見つかった。(京都市埋蔵文化財研究所)

^{ほうこうじ}
方広寺跡大仏殿は、安土桃山時代に豊臣秀吉が建設を開始するも、大地震により倒壊し、慶長 4 (1599) 年から豊臣秀頼が再建を開始した。今回の調査では、方広寺大仏殿南回廊の礎石据付穴が確認された。これまでの調査により、回廊は複廊であることが判明しており、今回の調査でも改めてそのことが裏付けられた。(京都市埋蔵文化財研究所)



写真2 寺町旧域・法成寺跡 4トレンチ全景(西から)

^{ふしみじょう}伏見城跡では、伏見城下の加賀前田家の屋敷跡と推定される地点において、伏見城築城時の大規模な造成跡と伏見城期の大規模建物に伴う大規模な礎石据付穴が確認された。五大老加賀前田家の伏見屋敷の様相をうかがえる資料となった。(京都市文化財保護課)

また、安土桃山時代の指月伏見城に関するものと考えられる石垣が確認され、金箔瓦等多数の遺物が出土した。(京都平安文化財)

^{よどじょう}淀城跡では、江戸時代の淀城跡の曲輪「内高嶋」とみられる石垣が確認された。桂川沿いに約90mにわたり石垣が残っている状況であった。(京都市文化財保護課)

^{しば}芝古墳(芝1号墳)は、京都市西京区に所在する古墳時代後期の前方後円墳であり、墳丘長は32.7mを測る。平成25年度より京都市による調査が行われており、乙訓地域最古の横穴式石室をもつ古墳であることが明らかとなった。(京都市文化財保護課)

〈乙訓地域〉

乙訓地域では、平成28年3月1日付で乙訓2市1町と京都市西京区に所在する11基の古墳を統合、名称変更し、「^{おとくにこふんぐん}乙訓古墳群」として国史跡に指定された。これまでに京都市西京区に所在する天皇の杜古墳、京都市、向日市の両市にまたがる寺戸大塚古墳、長岡京市に所在する恵解山古墳の3基の大型前方後円墳が国史跡に指定されていた。平成21年度以来、京都府及び京都市、向日市、長岡京市、大山崎町によって調査研究が進められ、古墳時代を通して政治状況を知ることのできる極めて重要な古墳群であるとしてその価値が認められた。

向日市^{いつかはら}五塚原古墳(史跡乙訓古墳群)は、向日丘陵に所在する全長91.2mを測る最古型式の前方後円墳であることが判明している。立命館大学と向日市による共同調査が行われており、今回の調査が第7次調査となる。今回の調査では、後円部北東斜面において2箇所の調査区が設けられ、これまでの調査成果と合わせて平面形が精美な円形に三段まで築かれたことが判明した。(向日市埋蔵文化財センター)

長岡京市^{いのうちくるまつか}井ノ内車塚古墳(史跡乙訓古墳群)は、古墳時代後期の前方後円墳で全長39mを測る。今回の調査では、後円部西側に接続する造り出しが検出され、周辺からは多量の埴輪が出土した。多様な形象埴輪が出土しており、造り出しにおける埴輪祭祀の様相を考える上で重要な成果となった。(長岡京市埋蔵文化財センター)

長岡宮第508次^{だいくでんいんかいろう}大極殿院回廊では、大極殿北面回廊の礎石据付穴8基や凝灰岩抜き取り跡が検出された。(向日市埋蔵文化財センター)

長岡宮第509次^{だいにないかくつじかいろう}第二次内裏内郭築地回廊では、西面築地回廊の東西雨落ち溝、庇柱、築地寄柱などが確認された。(向日市埋蔵文化財センター)

長岡京右京第1112次^{うきょうしじょうさんぼうよんちょう}右京四條三坊四町・^{とうきまち}陶器町遺跡では、古墳時代後期の大規模掘立柱建物が確認された。東西三間、南北六間以上の規模で、柱掘方は一辺1～1.4mの方形で、柱直径は40cmを測る。柱間寸法は、南北約2.7m、東西2.4～2.5mを測る。棟持柱を持つ構造であり、豪族居館の可能性が考えられている。(長岡京市埋蔵文化財センター)

〈山城地域〉

宇治市^{おおくぼかんごうしゅうらく}大久保環濠集落跡では、古墳時代中期の竪穴建物 4 棟などの遺構が確認された。竪穴建物からは、製塩土器や滑石製白玉未成品などが出土し、地域の拠点集落であったと想定されている。集落の時期が久津川古墳群の造営時期と重なることから同古墳群造営の基盤となった集落である可能性が指摘されている。(宇治市歴史まちづくり推進課)

宇治市^{おちかた}乙方遺跡では、弥生時代中期から飛鳥時代にかけての川跡が確認され、出土した土器から、隣接して同時期の集落が継続的に営まれていたことがうかがわれる。(宇治市歴史まちづくり推進課)

城陽市^{しもみずし}下水主遺跡では、木津川流域の低地において、縄文時代晩期の河川氾濫によって生じた洪水跡が確認された。この洪水跡(氾濫流路)からは、縄文時代晩期の土器のほか、木製品なども出土した。また、洪水によって流された直径 1 m を超える自然木もあり、木津川流域での縄文時代晩期の洪水の様子をうかがえる資料となった。古墳時代の流路からは、窓枠状木製品が出土した(当調査研究センター)

城陽市^{くつかわくるまづか}久津川車塚古墳(史跡久津川車塚・^{まるづか}丸塚古墳)は、山城地域最大の前方後円墳であり、史跡整備に向けての調査が進められている。今回の調査では、墳丘西側の造り出しの調査が行われた。造り出し上面の規模は東西約 10m、南北約 20m の台形気味の長方形で、裾部での規模は西辺



写真 3 御毛通 2 号墳 埴輪出土状況(南東から)



写真4 恭仁宮跡 宝幢(幢旗)検出状況(南から)
(京都府教育委員会提供)

で28m以上、南辺では、11.7m、高さ3.1mを測る。上面には円筒埴輪を方形に配し、多様な形象埴輪群が出土した。さらに、区画南半部には埋葬施設とみられる掘り込みがあり、くびれ部に取
りつく造り出しの持つ意味の再考が必要となる事例となった。(城陽市教育委員会)

八幡市女谷・^{おんなだに}荒坂横穴群、^{あらさか}御毛通古墳群では、平成5年度以降これまでに13次にわたる調査が行われ、80基の横穴が確認されている。今回の調査では、新たに7基の横穴が確認された。また、丘陵頂部では、平成24年度に一部確認していた御毛通2号墳の周濠延長部を検出し、直径22mの円墳であることが分かった。

木津川市史跡^{くにぎゅう}恭仁宮跡(山城国分寺跡)では、京都府教育委員会や木津川市教育委員会により昭和48年度以降、継続的に発掘調査が進められている。今回の調査では、朝堂院の南辺において宝幢(幢旗)遺構が確認された。宝幢(幢旗)とは、元日朝賀や天皇の即位儀礼の時に立てられた旗竿であり、『続日本紀』には、天平12(740)年の恭仁宮遷都後の天平13年、14年に、大極殿未完成のため、仮の場所で元日朝賀が行われたと記載されている。今回確認された遺構は2度にわたり使用されており、まさに天平13年、14年の元日朝賀に係る宝幢(幢旗)遺構であることが判明した。(京都府教育委員会)

木津川市史跡^{こまでら}高麗寺跡は、飛鳥時代に建立された府内最古の寺院跡のひとつである。木津川市により史跡整備事業が進められており、今回、塔心礎の再発掘が行われた。心礎は、花崗岩製で、南面に舍利孔が穿たれていた。(木津川市教育委員会)

(もり・ただし＝当調査研究センター調査課長)

追悼 上田正昭先生

井上満郎

平成28年3月13日早朝、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長の上田正昭先生が逝去された。88歳とご高齢で外出などは控えておられたが、前日まで元気に公務にあたっておられ、まさかのご逝去であった。歴史学のみならず日本文化の担い手であられたし、巨星が落ちた感がある。不世出という言葉があるが、先生はまさにそのような存在で、私どもの財団ばかりでなく、日本全体にとって貴重な方を失ってしまった。

先生が当財団に関わりをもたれたのは昭和62年4月で、この年1月に亡くなられた岸俊男先生（京都大学名誉教授）の後任として、日本古代史学の立場から調査・研究の指導にあたっていたいただくことになった。当時京都大学教授として多忙をきわめておられたが、趣旨に賛同して下さって理事にご就任いただき、以後さまざまな局面で財団に欠かすことのできない重要な役割を果たしていただいた。初代福山敏男・2代樋口隆康両先生をうけて理事長に就任されたのは平成15年だが、爾来ご逝去にいたるまで在職いただき、いっそう深くまた広く財団の用務にあたってくださいました。

先生は日本古代史を主たる対象にして研究され、既に29歳で書物を著しておられる。『神話の世界』がそれだが、早く式内小幡神社の神官を継職されたことと、國學院大學で折口信夫博士に師事されたことがあいまっての成果であった。戦前的呪縛から神話研究がまだ解き放たれていない段階だったし、どちらかという敬遠されていた分野に果敢に挑戦された。のち『日本神話』（1970年刊）に毎日出版文化賞が授与されていったんそれは実を結ぶが、神話とその背後にある歴史の研究は先生終生のお仕事になっている。

古代史研究の上で学界に華々しく登場されたのは、東京大学井上光貞氏との国県制論争で、先生最初の論文集『日本古代国家成立史の研究』（1959年刊）には若々しく情熱にあふれるその文章が見られる。当時先生は京都府立鴨沂高等学校の教諭で、一介の高校教師に天下の東大教授（当時は助教授）が正面から向き合ってくれたとししばしば感謝の言葉を漏らしておられたが、それをさせた先生の若い頃からの能力の開花をよく示す。“早熟”というわけではなかったが、問題点を的確に捕捉する天才的なひらめきを早くからもっておられた。

このひらめきを支えていたのが、抜群の記憶力である。講演などではメモらしいメモはほとんどお持ちにならないし、誰もが驚くのは『日本書紀』などの年紀が完全に頭に入っていることである。事もなげに何年何月何日条にこうあるといわれるし、ご自身では「それなりに努力はしているのだよ」と言っておられはしたが、驚異的な記憶力だった。さきの井上光貞氏も歴史家には

記憶力が大切だとどこかで書いておられたが、上田先生はそれを完璧に備えておられたといえよう。

取り組まれた学問は実に広く、「古代史研究」という枠にはとても収まり切らなかった。時代でいってもたとえば明治時代の大教宣布を分析されるなど近代も対象にされたし、分野では考古学はむろん、芸能史・部落史さらには地域史にも及んだ。

「象牙の塔」という言葉がある。緻密で理論的な成果も多くあげられたが、先生は決してそれを狭い学者世界、象牙の塔のみに留められなかった。たえず課題を現実社会から学び、またその研究成果をさらにその現実社会に還す、つまりは「社会化」に努力されたのである。これもしばしば言われていたが、高校教師時代に生徒から部落差別についての生の訴えを聞き、自らのものとして取り組んだとのことだった。その研究ばかりでなくいくつもの部落問題に関する組織に積極的に関係されたし、人権解放の努力への支援を惜しまれなかった。芸能史も同様で、古代の服属儀礼として追究するということもあったろうが、日本の芸能が多く被差別的 position にある人々によって担われたことは自明だし、光の部分ばかりでなく、そうしたいわば影の部分の歴史や文化



第50回埋蔵文化財セミナー
(於：京都会館 昭和62年4月1日)



第114回埋蔵文化財セミナー
(於：向日市民会館 平成21年8月15日)

にも正しく眼差しを注がれた。

日本歴史の国際的環境ということについても、大きな足跡を残された。確かに戦後この分野に新たな地平を築いたのは1962年の石母田正「日本古代における国際意識について」・西嶋定生「六―八世紀の東アジア」だが、そこには地についた歴史叙述がなかった。先生がよく言われた言葉の一つに「ルート論」があるが、なるほど日本列島における歴史展開が東アジア地域の国際的環境につながることは理屈では分かった。しかし「ルーツ」だけでなく、いかにしてその環境が我が国の歴史・文化と関わったのかというヒトとモノの「ルート」を解明しないかぎり、日々の暮らしを生きる人間の築いた歴史は見えてこない。渡来人が先生の業績になったのは、まさにそれであった。「帰化人」研究は戦前の喜田貞吉氏などいくつかありはしたが、「帰化人」「史観」への批判とあわせて、広く深くまた丁寧に渡来人と渡来文化を掘り起こされた。それは教科書を「帰化人」から「渡来人」へと書き換えさせる業績となったのであり、与えた社会的影響は大きなものであった。



第28回小さな展覧会
(於：向日市文化資料館 平成25年8月27日)

狭い意味での学問研究をはるかに超えられた先生であったが、諸種の組織・機関にも積極的に、労を厭わず関わられた。自分でも分からないと言われたほど委員・理事・評議員などをされたし、京都市学校歴史博物館長・高麗美術館長、さらには京都府・京都市の文化財保護審議会会長なども務めておられる。それらは枚挙に遑ないが(私家版米寿記念『略年譜・主要著作目録』2014年)、80冊に及ぶ著書を残されたこととあわせてとにかくそこに通底するのは学問の「社会化」であり、いつも現実の、今ここにある社会を見つめ続けておられた先生をこれらのご活躍は象徴する。市民講座などにも積極的に足を運ばれたし、どのような初歩的質問にも、決して軽んじることなく懇切に答えておられた。学者にとって研究・教育が重要な責務であることは当然だが、それとあわせて社会活動が行なわれねばならない。そこではじめて人間としての「使命」を果たしたことになる。史料に埋没し、史実の学的追究だけならそれは歴史研究にあたる誰もがすることであろう。過ぎ去った時代、再現されることのない過去を研究するにしても、たえず現代からその課題を学び、さらにその成果を広く社会に還元してこそ「使命」は果たされるのであり、そこではじめて真の学問といえる。先生の学問はまさにそうした社会性・真正性を持つものであり、被差別部落・渡来人・芸能と民衆といった、社会の影の部分に生きた人々や、その歴史と文化に光を当てられたことも合わせて、その業績はわたしどもに幾多の感動を与える。

当財団に理事・理事長として関わってくださったのも、そのような先生の社会への姿勢をよく示す。わたしたちの用務は「発掘調査」ということで広く認識されるが、府民の方々にその姿が見えてくるのは現地説明会がほとんど唯一の機会であろう。しかしその背後には職員や作業員をはじめ、多くの人々がいる。夏の暑さ冬の寒さをしのぎ、また施主との折衝や調査計画の立案にも当たらねばならない。当然その間に多くの問題・課題も生じる。それらを乗り越えての現地説明会実施なのであるが、そうした具体的な作業、人の営みにも先生は目を注いでくださっていた。これほど「適役」の方は他にないといって過言ではなかろう。かえすがえすも先生のご逝去は残念でならない。

この度はからずも先生の跡をうけて理事長職についた。上田先生の偉大な足跡に到底及ぶべくもないが、先生の敷かれた道筋をしっかりと受け継ぎたく思っている。京都府埋蔵文化財調査研究センターのよき未来を築いていきたいと決心していることを最後に申し添えて、先生追悼の言葉を閉じさせていただく。

(いのう え・みつお＝当調査研究センター理事長)

前理事長・上田正昭先生の御逝去を悼む

小谷 昌弘・磯野 浩光

平成28年3月13日、突然の訃報に接してから、密葬、偲ぶ会を経て半年以上が過ぎましたが、まだ心に大きな穴があいており、悲しみは癒えることがありません。

前理事長の上田正昭先生は、今さら申すまでもなく、東アジアを視野に入れた日本古代史の泰斗であり、「学問の成果を社会に還元し、社会から課題を学ぶ姿勢を最後まで貫かれたことが大きな足跡」（井上満郎理事長談）です。この点は、新聞各紙の訃報に多大な御業績とともに「民のアジア交流に光－戦争と差別原点に」（京都新聞）、「日本史に斬新な理論－東アジア考察「上田史学」」（読売新聞）、「歴史観ゆがみ正す－人権問題にも生涯」（毎日新聞）、「「アジアの日本」見詰め－中韓の研究者と学会」（朝日新聞）、「古代史ロマンの語り部」（産経新聞）などと大きく報道されたことにも裏付けられています。さらに、



神雄寺跡(馬場南遺跡)出土遺物の御指導
(於：木津事務所 平成21年6月)

亀岡市の延喜式内社、小幡神社の宮司として約70年間、地域の絆の中核として祭祀、信仰に尽力され、数少ない神職身分最高位の特級を授与(平成24年2月)されておられました。

上田先生は、当調査研究センターの理事(昭和62年4月～平成28年3月、29年間)、理事長(平成15年4月～28年3月、13年間)として長期間、調査研究面と健全な運営について、多大の御指導をいただきました。

最近の具体例で申しますと、平成19、20年度に発掘調査しました木津川市の馬場南遺跡(平成27年3月、「神雄寺跡」として国史跡に指定)は、全国3例目の万葉歌が記された歌木簡や200点以上の墨書土器、5,000点以上の灯明皿など多彩な遺物が出土した奈良時代の山林寺院跡ですが、上田先生は、この遺跡の性格や墨書土器の解読のため、お忙しい中、何回も熱心に現地や遺物の御指導をいただきました。



設立30周年記念講演会
(於：向日市民会館 平成22年9月)

平成27年度の設立35周年記念展覧会とシンポジウムの名称は、上田先生が強調された「和魂漢才」の用語を用いましたので、この記念行事



京都府文化財保護審議会
(於：ルビノ京都堀川 平成15年1月)

の遂行にも大変強い信念をお持ちでした。11月の記念シンポジウムには体調不調にもかかわらず、「古代東アジアと京都盆地」と題した有意義な御講演を賜り、記念論集『京都府埋蔵文化財論集』第7集には一番に玉稿をいただきました。その後の12月の理事会も、いつもと同様理事長として会務を主導いただき、急逝された翌日の3月14日に我々両名は今後の運営について面会の約束をしていたほど、調査研究の進展と円滑な運営にいつも心を配っていただきました。

当調査研究センターの新年仕事始め式では、平成27年まで年頭のご挨拶をいただいていたのですが、最後の年の「地域の歴史に対する理解と真摯な姿勢がなければ、その発掘調査は単なる『検出』である。」とのお言葉は、出席した職員の胸に今も深く刻まれています。

また、京都府教育委員会においても、府文化財保護審議会の委員(昭和61年4月～平成18年3月、10期20年間)を長く務めていただき、会長(平成12年7月～18年3月、3期6年間)の重責も果たしていただきました。会長在任時には、亀岡祭山鉾行事(府登録無形民俗文化財)や京丹後市・高山12号墳(府指定史跡、出土品が当調査研究センターのロゴマーク)など府内の文化財の指定等による保護の推進を図られるとともに、遺跡の保存問題などの重要課題についても、時宜を得た有益な御指導を賜りました。

さらに、『宮津市史』、『亀岡市史』、『向日市史』、『山城町史』の編纂において、専門委員長として執筆や監修の任に当たられ、地域の斬新な歴史像の解明と将来のまちづくりへの指針を示されたことも特筆すべきです。

『上田正昭著作集』第5巻に亀岡を「口丹波」と書かれた(271頁)ことについて、僭越にも「京都市内中心の用語ではないか。」と質問しましたら、丁寧に「中丹を基準にしての表現で、これでよいと思っています。「丹波口」は都からの視座ですが、中央アジアを基準に東アジアというのと同じではないでしょうか。ご留意ありがとうございました。」と、お葉書をいただいたことがあります。このように、公私にわたって、細かい点にまで、大変丁寧にやさしく御指導いただきましたことについて、感謝の言葉は尽きず、御逝去が心から惜しまれます。

謹んで御冥福をお祈りいたしますとともに、上田先生の御指導を糧に、当調査研究センターの今後の発展と埋蔵文化財をはじめ府内の文化財の保護に一層邁進しなければならないと決意を新たにして、追悼の言葉を結びます。

(こたに・まさひろ＝当調査研究センター常務理事・事務局長)

(いその・ひろみつ＝当調査研究センター理事・府教育庁指導部理事文化財保護課長)

故上田正昭前理事長の当調査研究センターにおける主な事績

○役 職 (※平成23年4月1日に財団法人から公益財団法人に移行)

- ・理 事 昭和62年4月1日～平成28年3月13日 15期29年
- ・理事長 平成15年4月1日～平成28年3月13日 7期13年

○ご執筆

- ・「北ツ海古代文化の再発見」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 平成8年3月
- ・「遺跡と文献伝承」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 平成13年3月
- ・「古代の女帝とその背景」『京都府埋蔵文化財論集』第5集 平成18年3月
- ・「神仏習合史の再検討」『京都府埋蔵文化財論集』第6集 平成22年12月
- ・「古代の東アジアと京都盆地」『京都府埋蔵文化財論集』第7集 平成28年3月

○監 修

- ・当調査研究センター編集『天平人の華と祈り－謎の神雄寺－』平成22年12月 柳原出版

○ご講演

- ・「ヤシロと古墳」第50回埋蔵文化財セミナー(平成元年2月18日、於：京都会館)
- ・「木津川市馬場南遺跡が語るもの－神雄寺跡万葉木簡－」第114回埋蔵文化財セミナー(平成21年8月15日、於：向日市民会館)※前掲の『天平人の華と祈り』に収録
- ・「聖武天皇と天平文化」当調査研究センター設立30周年記念特別講演(平成22年9月4日、於：向日市民会館)
- ・「古代東アジアと京都盆地」当調査研究センター設立35周年記念特別講演(平成27年11月29日、於：向日市民会館)

○現地指導、資料調査指導

木津川市上人ヶ平遺跡、同市馬場南遺跡出土文字資料等計25回



平成27年度辞令交付式(於：当調査研究センター 平成27年4月)

平成 27 年度発掘調査略報

8. ^{あ ら す}阿良須遺跡第 1 次

所在地 福知山市大江町北有路

調査期間 平成27年11月17日～平成28年2月26日

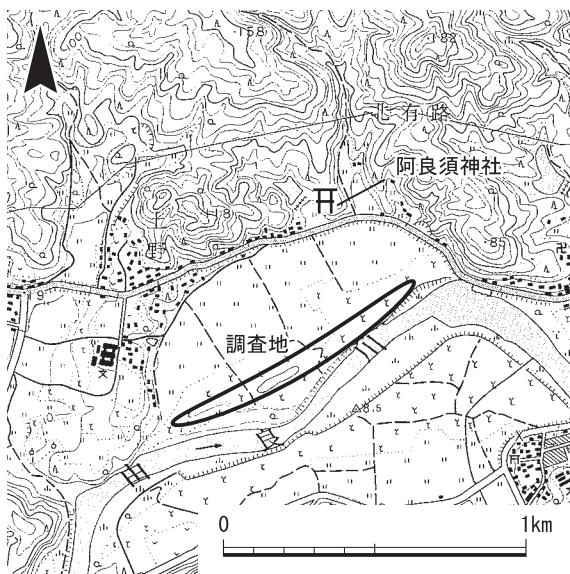
調査面積 1,000m²

はじめに 阿良須遺跡は、由良川中流域の平野部に位置する古墳時代の遺物散布地である。これまで発掘調査は行われていないが、条里制の地割遺構が残存することが指摘されている。遺跡の北には式内社である阿良須神社が位置しており、由良川を挟んで対岸には古墳時代後期から飛鳥時代に属する竪穴建物が多数検出された高川原遺跡が存在する。

今回、当該遺跡地内に由良川緊急治水対策事業が計画されたため、これに先立って遺構の内容を把握するとともに、正確な記録を作成することを目的として発掘調査を実施した。

調査概要 調査対象地は由良川左岸の自然堤防に広がる休耕地であり、50～60m幅で北東から南西にかけておよそ1kmの範囲に及ぶ。本年度の調査では調査対象地の9か所にトレンチを設定した。由良川下流側に設定した2か所のトレンチでは現代の造成が深い地点まで及んでおり、さらにその西側の2か所のトレンチにおいても顕著な遺構、遺物は確認できなかった。

上流側に設定したトレンチにおいては標高6.8～7.0mの地点で由良川の洪水に伴うと考えられる砂利層を検出した。この砂利層からは備前焼播鉢や土錘など中世の遺物が出土したが、顕著な遺構は認められなかった。また、標高6.0m付近では、古墳時代後期に属する溝、土坑などの遺構を検出した。さらに、最も上流側に設定したトレンチでは土坑埋土中より飛鳥時代前半の土師



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 河守)

器や須恵器のほか、刀子や釘などの鉄製品が出土している。

まとめ 今回の調査で、阿良須遺跡の中心は遺跡西側の自然堤防上に広がっていることが明らかとなった。また、遺構からは飛鳥時代前半の良好な土器資料が出土しており、この付近に古代の集落の広がりを想起させる調査となった。

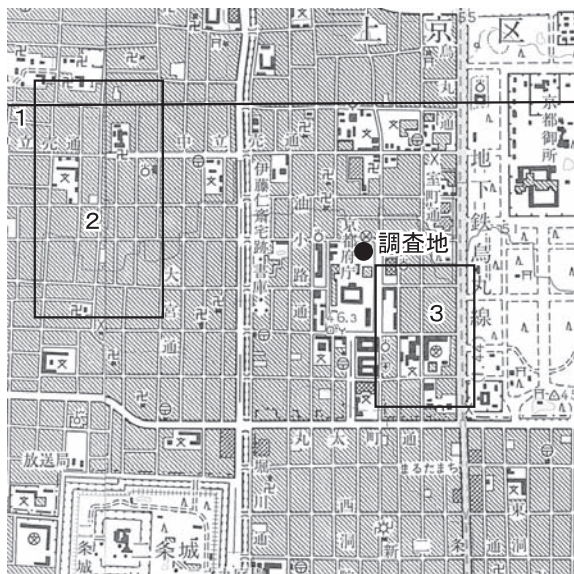
(当センター元職員・京都府教育庁指導部文化財保護課＝桐井理揮)

9. 平安京跡(平安京左京一条三坊二町)

所在地 京都市上京区下長者町通新町西入藪ノ内町42番地

調査期間 平成27年9月1日～平成28年12月下旬(予定)

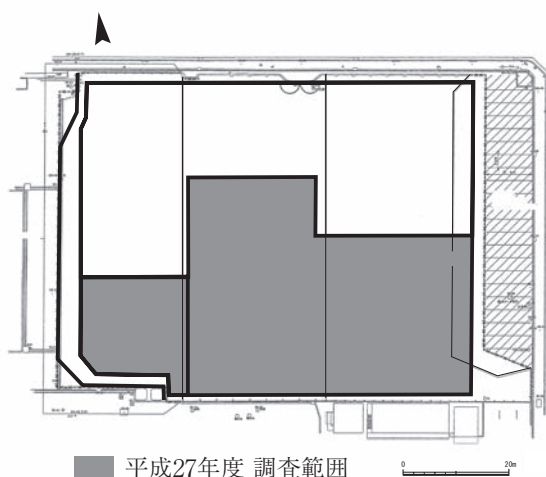
調査面積 3,500㎡



第1図 調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 京都西北部・東北部)

1. 平安京跡 2. 聚楽第跡 3. 旧二条城跡



第2図 調査範囲図

などを検出した。溝は南北溝、東西溝の2条を検出した。東西溝は検出長24.2m、幅1.0m、深さ約0.3mを測る。南北溝は検出長約15.0m、幅約1.4m、深さ0.5mを測る。室町時代の遺物は、土師

はじめに 今回の発掘調査は、京都府警察本部新庁舎建設工事に伴い、京都府警察本部の依頼を受けて実施したものである。調査地は、下長者町通と新町通に面し、京都府庁の北東側に位置する。平安京の左京一条三坊二町にあたり、調査地北側には鷹司小路(現在の下長者町通)の南側溝が推定されている。桃山時代は聚楽第に伴う大名屋敷地と考えられている。江戸時代末期には、京都守護職に命じられた会津藩主松平容保の上屋敷が置かれていた。

平成2年に当調査研究センターは、今回の調査地の西側、京都府職員福利厚生棟の地点で発掘調査を行い、西洞院大路の両側溝のほか、室町時代の堀などを検出している。

調査の概要 今回の調査は、調査地を北側と南側にわけ、反転調査を行っている。現在、南側の調査が終了しており、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代、桃山時代、江戸時代の遺構面と遺構を検出した。

①平安時代後期～鎌倉時代 ピット・土坑などを検出した。土坑には、東西3.5m、南北4mで、北東がゆがむ方形の堀形で、深さは約4mを測るものがあり、平安時代後期の土師器・須恵器・瓦器・緑釉陶器・灰釉陶器・中国製青磁・瓦などが出土しているものがある。

②室町時代 柱穴・溝・ピット・井戸・土坑

器・須恵器・瓦質土器・中国製輸入陶磁器・銭貨などが出土した。

③桃山時代 土坑、溝、ピットなどを検出した。検出長23.5m、幅1.5m、深さ1.5～2.0mを測り、南北に延びる溝がある。北側は現在未調査区へ延びており、調査地を縦断すると考えられる。遺物は土師器皿・信楽焼播鉢・瓦器などが出土した。そのほかの土坑からは、大名屋敷との関係を示す金箔瓦・家紋飾瓦が出土している。



写真1 調査地 全景(北西から)

④江戸時代初頭 柱穴、井戸、土坑、石室などを検出した。調査地中央より西側で、南北に連続する大型土坑群を検出した。ひとつひとつの土坑は、1辺2.5～5.0mの楕円形ないし隅丸方形の堀形で、深さは1.0～1.7mを測る。埋土からは、土師器皿・瓦器・瀬戸美濃系陶器、肥前系陶器、瓦など多量の遺物が出土した。廃棄土坑と考えられる。出土した遺物の中には、織部向付・黒織部・志野碗・絵唐津碗・信楽焼建水・



写真2 大型土坑群(北から)

瓦質茶釜・土師質灰器・焙烙などの茶陶のほか、中国製磁器・李朝陶磁器・ベトナム陶器などの輸入陶磁器が多数含まれることから、裕福な人物が居を構えていたと考えられる。土坑群の西側では、黄褐色の整地面を確認している。

⑤江戸時代末 地表下約0.5mで江戸時代末の遺構面を検出した。京都守護職上屋敷に伴うとみられる根石・石組溝・井戸を検出した。根石は直径約0.8m、深さ0.2～0.4mの穴に礫を充填しており、その上部に礎石を据えたと考えられる。建物の復元には今後の検討が必要であるが、『大工頭中井家建築指図集』にある「守護職上屋舗絵図」に描かれた長屋風建物の南北棟1棟・東西棟1棟分にあたると考えられる。

まとめ 今回の調査で平安時代から江戸時代にかけての土坑・溝・柱穴・井戸などを検出した。柱穴は調査地全体で多数検出しているが、現在建物の復元には至っておらず、今後の検討が必要である。井戸はすべて石組で、木枠を持つものは検出されていない。溝や土坑群は、各時代の土地割に伴うものと考えられる。室町時代から江戸時代初頭にかけて、町内の地区割の変遷を考える上で大きな成果だと考えている。現在、調査地北側を調査中であり、前掲の溝や土坑は北側調査区へ延びるものが多く、今後の調査に期待される。

(綾部侑真)

みのやま 10.美濃山遺跡第4次

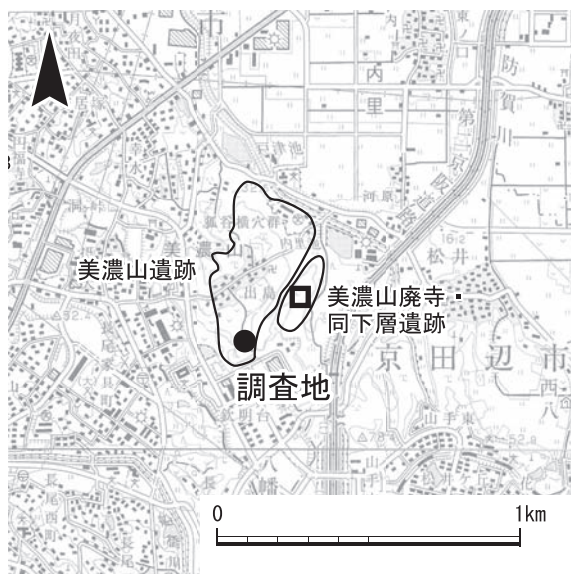
所在地 八幡市美濃山細田

調査期間 平成27年11月25日～平成28年3月2日

調査面積 1,500㎡

はじめに この調査は、新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。美濃山遺跡は、過去の3次にわたる調査において、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴建物や土坑のほか、主に律令期を中心とする掘立柱建物や土坑などが検出されている。また、美濃山遺跡北東には、美濃山廃寺や美濃山瓦窯跡が立地し、奈良時代～平安時代にかけての掘立柱建物群を中心とする遺構が検出されている。今回の調査は美濃山遺跡の南端部に位置し、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の竪穴建物や土坑のほか、主に奈良時代～平安時代前期と推定される柵列や溝などを確認した。

調査概要 調査は、低丘陵の緩やかな傾斜地に1か所の調査区を設定して実施した。調査区の中央から東にかけて大きく旧地形が改変され、後世の削平を受けていた。遺構の残存状況は極めて悪いが、柵列を構成するとみられる柱堀形の一部を検出した。柵列S A 1は、調査区東部の丘陵裾部で検出したもので、南北方向の主軸をもつ柵列である。7間以上の規模をなし、柱間は3.1m～5.0mを測る。柱穴の平面形は方形を呈し、規模約一辺0.5～0.6mを測る。周辺は東側に谷部が形成される地形で、この柵列は西側の高台に位置すると推定される施設に関わる柵列と推定される。北側の谷部では、谷状の地形を一部再掘削した落ち込みと、検出面での幅約0.7mの溝を検出した。いずれも律令期の遺物が出土しており、谷地形を利用して掘削された溜め井戸と排水溝と推定される。弥生時代の遺構としては、西側傾斜面で、方形の平面形をなす竪穴建物や土



調査位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

坑を検出した。竪穴建物は、床面の一部を確認したもので、出土土器から弥生時代後期後葉と推定される。

まとめ 今回の調査では、弥生時代後期の住居跡を確認し、遺跡の南部を中心に美濃山廃寺下層遺跡と同時期の遺構群が拡がり、広い範囲に同時期の集落が形成されることが判明した。また、律令期と推定される柵列や土坑など、美濃山廃寺や瓦窯と同時期の遺構群を検出したことから、一帯が律令期に大きく開発されたことが判明した。

(高野陽子)

おんなだに あらさかおうけつぐん
 11. 女谷・荒坂横穴群第14次

所在地 八幡市美濃山御毛通地内

調査期間 平成27年10月19日～平成28年3月4日

調査面積 2,500㎡

はじめに この調査は、新名神高速道路整備事業に先立ち、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。女谷・荒坂横穴群は、八幡市西辺の八幡丘陵に位置し、これまでに70基の横穴墓が確認されている。丘陵頂部では御毛通古墳群があり、方墳・円墳が各1基確認されている。

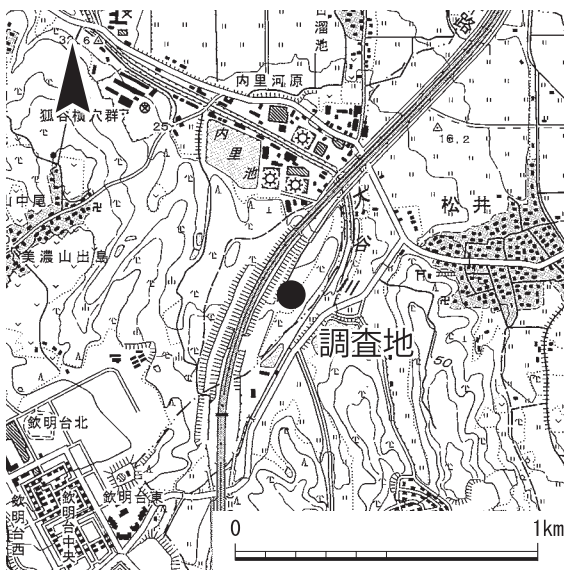
調査概要 丘陵頂部に1～5トレンチを、丘陵斜面に6・7トレンチを設定した。1・2・5トレンチは地山まで攪乱されており、遺構・遺物は認められなかった。

3トレンチ 平成24年度に御毛通2号墳の周溝の一部を検出した調査区の北西に設定した。調査の結果、同古墳の周溝の北西部を検出した。周溝は、幅4.5m、深さ0.5mを測り、総長20.3mを検出した。前回の調査と合わせると古墳全体の4割程度を検出したこととなる。古墳の推定直径は22mとなる。周溝内より古墳時代中期頃の甲冑・家・盾などの形象埴輪片が出土した。

4トレンチ 調査区の南側で検出長2.5m、幅1.8m、深さ0.3mの土坑状の落ち込みを検出した。この土坑状の落ち込みからは須恵器片・埴輪片が出土した。

6トレンチ 3基の横穴墓を確認した。これらは墓道の先端付近を検出しただけで、羨道・玄室は調査区外に延びる。出土遺物に土師器片・須恵器片などがある。

7トレンチ 4基の横穴墓を検出した。うち3基は、遺物の出土はなかった。遺物が出土したSX15は、全長13.2m、玄門幅1.5m、最大幅2.3mの規模を測る。平面的に見ると、玄室東壁は膨らみをもつが、西壁は墓道・羨道からの直線的なラインを描く。片袖式石室を意識した可能性がある。



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

ある。人骨2体、須恵器・土師器、耳環・金属製品などが出土した。東側の人骨は集骨され、追葬が行われた可能性がある。西側の人骨は残りが悪く、頭蓋骨の一部が出土しただけである。

まとめ 今回の調査では、円墳1基、横穴墓7基を確認した。御毛通2号墳では、過去の調査で家・鶏形埴輪が出土していたが、今回の調査で甲冑や盾などの形象埴輪の存在わかった。さらに女谷・荒坂横穴群はこれまで考えられていたように、横穴の分布がさらに南側に広がり、横穴群全体で300基以上になることが追認できる。(竹村亮仁)

12. 下水主遺跡第9次・水主神社東遺跡第7次

所在地 城陽市寺田金尾地内

調査期間 平成27年5月18日～平成28年2月5日

調査面積 4,540㎡

はじめに 下水主遺跡・水主神社東遺跡は、城陽市南西部に位置し、木津川によって形成された微高地やその後背湿地に立地している。平成27年度は、下水主遺跡(第9次調査)でE・H・L地区の、水主神社東遺跡(第7次調査)でD地区の調査をそれぞれ実施した。今回の調査は、新名神高速道路整備事業に伴い西日本高速道路株式会社の委託を受けて実施したものである。

調査概要 下水主遺跡H地区では、中世の島畑7基や古墳時代の溝1条などを検出した。島畑のうちの1基は、平成25年度に確認していた南北方向の島畑の南西部にあたる。残りの6基は、今回、新たに確認したもので、いずれも東西方向の島畑の東半部のみを検出した。また、調査区の北端で古墳時代の溝S D25を検出した。溝の断面形は緩い「U」字状を呈する。溝からは古墳時代初頭の庄内式を主とする土器群や杵状に組まれた部材の間に檜皮を挟み込んだ窓杵状木製品などが出土した。このほか、縄文時代晩期の土器片がまとまって出土した。

下水主遺跡L地区では、島畑本体は検出されず、島畑に伴う溝状遺構の一部を確認した。

下水主遺跡E地区では、新たに橋脚等が建設される2地点の調査を実施した。両調査区で、それぞれ島畑1基を検出したが、いずれもその一部を検出したにとどまった。

水主神社東遺跡D地区では、中世の島畑2基などを検出した。島畑のうち1基は新たに検出したもので、南北方向の島畑である。もう1基は平成25年度に検出しており、その東側の裾を確認した。また、下層遺構として時期不明の溝を2条検出した。いずれも遺物は出土しなかった。



調査地位位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)

まとめ 今回の調査で、新たに島畑を9基検出した。これまでの調査で確認された島畑の総数は111基となった。

古墳時代の遺構として溝S D25を検出した。S D25は、平成26年度に調査を実施した第6次調査J地区の溝S D04と同一のものと考えられ、その総延長は150mに達する。

このほか、時期不明の溝や縄文時代晩期の土器片などを検出した。溝はこれまでの調査から弥生時代後期ないし古墳時代前期と推定される。

(筒井崇史)

そ ま だ す が わ 13. 岨田遺跡・砂川古墳

所 在 地 宇治田原町禪定寺砂川

調査期間 平成27年12月16日～平成28年 3 月 4 日

調査面積 1,500㎡

はじめに 岨田遺跡と砂川遺跡は宇治田原町北西部を流れる禪定寺川左岸の丘陵地に位置する。岨田遺跡は、遺物散布地として縄文時代の石鏃や瓦が採集されている。砂川古墳は、岨田遺跡の北東端において地形が隆起しているか所であり、径7mの古墳とされている。調査は新名神高速道路建設に先立ち西日本高速道路株式会社の委託を受けて実施した。

岨田遺跡 丘陵斜面に直交する調査区を7か所(1～7トレンチ)、傾斜に沿った調査区を2か所(8・9トレンチ)設定した。7トレンチにおいては、表土下0.1～0.3mの高さで整地面を確認し、径0.2～0.4mの円形のピットを10基検出した。遺物が出土しておらず時期は不明であるが、土壌の色調などから比較的新しい時期の整地と考えられる。その他の調査区では遺構の検出はない。

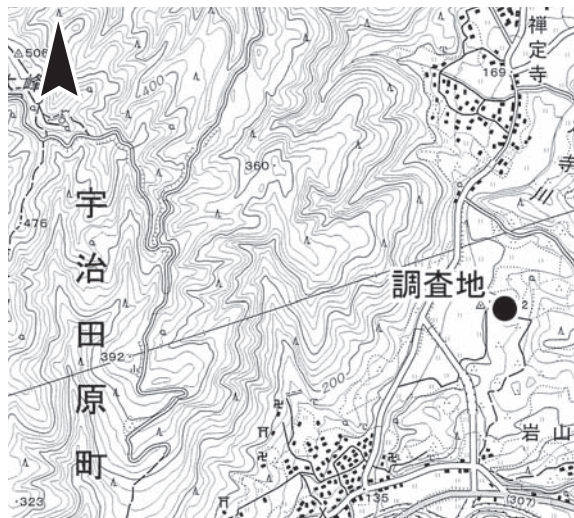
砂川古墳 この古墳は北に下る斜面地の傾斜に沿って南北8.1m、東西7.0mの範囲で隆起する馬の背状の地形である。最高所の標高は168.83mで、平坦面はほとんど認められない。北裾との比高は1.39mである。調査の結果、地山上に厚さ10～20cmの旧表土があり、その上に盛土されていることが判明した。旧表土中からは17世紀初頭の唐津焼の底部片が1点出土したことから、この隆起は古墳ではなく、近世初頭以降に盛土されたものであることが判明した。

炭窯 旧表土下において、炭窯を1基検出した。東西に主軸をもち、東端は削平されている。検出長は5.8mである。炭化室は隅丸長方の平面形で長さ4.06m、幅1.2m、深さ0.24mである。底面の高さは西端の方が0.3m高くなっており、西側に煙道があったと考えられる。炭化室の東には焚口があり、長さ1.74m、幅0.53mである。焚口と炭化室の連結部には土坑状に窪んだ部分がある。旧表土下にあることから、17世紀初頭以前のものである。土窯に分類できるものであり、黒炭を得るためのものと考えられる。

まとめ 今回の調査区は岨田遺跡の遺跡範囲の北東端部にあたり、この付近での遺跡の展開が薄いことが明らかになった。

砂川古墳とされていたものは近世初頭以降の盛土であると判明した。炭窯は隅丸長方形の炭化室に細長い焚口をもっているもので今後、炭化物の分析などをとおして具体的な時期を求めてゆきたい。

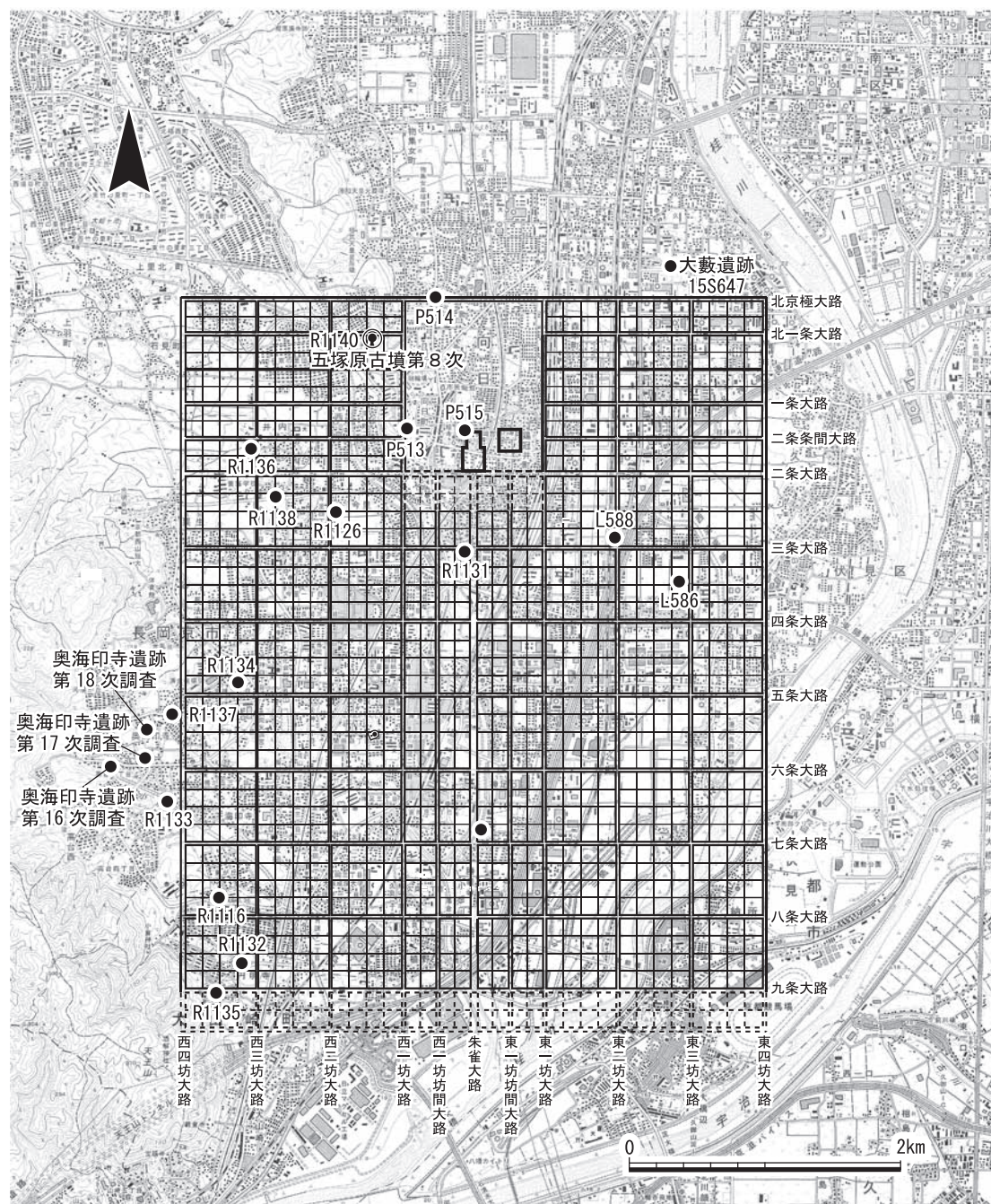
(加藤雅士)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宇治田原)

長岡京跡調査だより・126

長岡京跡の発掘調査情報の交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成28年3月から8月の例会では、宮域3件、左京域3件、右京域11件、京域外4件の合計21件の調査報告があった。その中で、主要な調査例について報告する。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域 向日神社参道に南面する**宮第513次調査地**(向日市向日町)は、弥生時代中期後半の集落跡である北山遺跡と重複する。これまでに5基以上の方形周溝墓が確認されているが、今回、さらに1基を検出した。一方神社絵図にみえる「神楽所」伝承地において、近年まで残されていた瓦葺き建物(参集所)解体にかかる瓦廃棄土坑が検出された。近世物集女街道の拡幅を目的に実施された**宮第514次調査**(向日市寺戸町)では、13世紀の瓦器碗などが出土する石組み井戸や土坑などが検出され、中世の垣内集落(寺戸村)の初源を知るうえで有益な情報が得られた。これまでの調査成果の蓄積でその構造が解明されつつある大極殿院の北西部において**宮第515次調査**(向日市鶏冠井町)が実施され、北面回廊の西端の礎石据付痕跡が確認されるとともに、宮造営に係る大規模な造成で改変を受けた山畑古墳群に関係する埴輪片を投棄した土坑を検出した。

左京域 **左京第586次調査地**(京都市伏見区)は、西岡被官衆の居館と推定されている羽束師菱川城の本丸北堀の北側に位置し、長岡京期の大型掘形の柱穴と南北主軸の規模の大きな溝数条、東西溝などが検出された。南北溝のうち四条三坊十四町の東西を二分する位置にある規模の大きな溝からは火舎・転用硯などが出土した。

右京域 古代の乙訓寺推定地の北東に近接する**右京第1126次調査**(長岡京市今里)では、調査地内を蛇行しながら流下する弥生時代から古墳時代前期の流路と、平安時代(9世紀中頃)の甕据付穴をもつ掘立柱建物の南庇柱列を検出した。流路跡から緑釉陶器、灰釉陶器、軒先瓦などの多量の遺物が出土した。なかでも、鳥形の硯蓋は、猿投産に類例がある。円明寺跡の境内地と推定される**右京第1135次調査**(乙訓郡大山崎町)では、明確な遺構は検出されなかったが、谷地形の包含層から中世の土器や瓦、木製品などがややまとまって出土した。上里遺跡と井ノ内遺跡が重複する地点に位置する**右京第1136次調査**(長岡京市井ノ内)では、東に隣接する調査区ですでに確認されている溝の西延長部を検出した。

京域外 **奥海印寺遺跡第17次調査**(長岡京市奥海印寺)では、南北に流下する湯谷川の東岸に形成された河岸段丘上で初めて、江戸時代の遺構・遺物が確認された。過去の土地利用の一端が解明された。

(伊賀高弘)

現地公開状況(平成28年3月～平成28年8月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、当調査研究センターが発掘調査をしている京都府内の遺跡の現地説明会や遺跡見学会などの現地公開を行っている。

現地見学会

4月16日(土)に八幡市男山東中学校校区の小中学生を対象に女谷・荒坂横穴群の現地見学会を実施した。小学生、保護者合わせて約150名が参加し、熱心に調査担当者の説明を聴くとともに、数多くの質問があった。

現地説明会

4月23(土)に八幡市の女谷・荒坂横穴群で現地説明会を実施した。女谷・荒坂横穴群では、新たに7基の横穴が見つかった。S X 15からは須恵器や土師器、2体の人骨などが出土した。当日は、京都府外からも多くの参加者があり、124名の方が参加された。

4月26日(火)に京都府庁及び京都府警察本部職員を対象に京都府庁北側に位置する平安京跡の現地説明会を実施した。平日の12時から13時までの短い時間であったが、307名の方が参加され、身近な地域の歴史への関心の高さが窺えた。

4月28日(金祝)に平安京跡の現地説明会を実施した。現在の京都府庁敷地は、江戸時代末期に京都守護職上屋敷が置かれた場所である。今回の調査で初めて上屋敷に伴う遺構を検出した。一方、安土桃山時代の大名屋敷に伴う金箔瓦が出土した。当日は、天候に恵まれないなか413名が参加された。参加者は、遺構や写真パネル、上屋敷絵図、出土遺物の説明を熱心に聴かれ、多くの質疑応答がなされた。

8月6日(土)に城陽市の芝山遺跡で現地説明会を実施した。芝山遺跡は従来の調査で奈良時代の建物群が確認されており、今回の調査でも同時期の建物群を検出しました。当日は猛暑の中、京都府外からも多くの方が来られ、114名の参加者を得た。

(菅博絵)



平安京跡現地説明会

普及啓発事業(平成28年3月～平成28年8月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナーや小さな展覧会をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加などの普及啓発活動を行っている。

第132回埋蔵文化財セミナー

第132回埋蔵文化財セミナーを、6月4日(土)に舞鶴市西総合会館4階第1会議室で実施した。

今回のセミナーでは『京都北部の中世社会』と題して、基調報告を京都府立丹後郷土資料館森島康雄資料課長が「考古資料から見た丹後の中世社会」、事例報告1を当調査研究センター綾部侑真調査員が「大川遺跡の調査成果について」、事例報告2を京都府立東舞鶴高等学校廣瀬邦彦教諭が「戦国時代の舞鶴と中山城を考える～中山城発掘調査成果を踏まえて～」と題して行った。



第132回埋蔵文化財セミナー会場風景

基調報告では、「居館と城」「墳墓と経塚」「土器・陶磁器と銭貨」の3つの視点から丹後の中世社会を捉えていった。丹後地域には、中世集落と居館の関係が明確に区別できる事例がなく、中世城館では、平城よりも山城が多く存在する。また地面に掘った竪穴の側面に横穴を掘り、土師器筒形容器を埋める独特な構造の経塚がある。そして、丹後の土器様相から商品流通が広く行われていた社会であったなど、丹後地域は、社会の変化を受けながらも、独自の地域色をもっていたことが報告された。

事例報告1では、平安時代から室町時代の大川遺跡の発掘調査成果に焦点を当てた報告を行った。集落内において鍛冶関連遺構と建物跡の間に空閑地があり、鍛冶関連建物と居住域を分けていたことが明らかとなった。また、輸入陶磁器が多く出土することから、中世において由良川流通の拠点集落であった可能性が報告された。

事例報告2では、文献資料と中山城跡発掘調査成果から、中山城が3回増築され、増築時の城主を推定した。また、立地や地名から、中山城は、陸路交通の要衝施設であるだけでなく、船を監視するような役割を持つ城でもあった可能性が示された。

京都北部では3年ぶりのセミナー開催だが、舞鶴市だけでなく、京都府内外からも参加していただき、56名の参加者を得られた。また、考古学の視点だけでなく、文献との対比により、中世城郭を検討した報告もあり、盛況の内に終了した。

第133回埋蔵文化財セミナー

第133回埋蔵文化財セミナーを、8月20日(土)に向日市寺戸公民館2階大会議室で実施した。

今回のセミナーでは、『近年の発掘調査成果速報～第30回小さな展覧会展示遺跡から～』をテーマとして、当調査研究センター加藤雅士主任が「『大型群集墳』としての松井横穴群」を、公益財団法人向日市埋蔵文化財センター梅本康広事務局長が「史跡五塚原古墳の調査研究課題」を、当調査研究センター菅博絵調査員が「『第30回小さな展覧会』の見どころ」の報告を行った。

第1題では、京田辺市松井横穴群においては、平成24年から27年の発掘調査で新たに70基の横穴墓が確認され、松井横穴群の範囲に同様な横穴墓が分布すると仮定した場合、約300～400基の横穴墓が分布すると想定される。一方、八幡市から京田辺市にかけての地域にも、横穴墓が集中しており、松井横穴群と付近の横穴群をあわせると、600～700基程度の一大横穴群となる可能性を示した。また、出土した小型陶棺は、付近の横穴群では出土しておらず、通有にみられる陶棺はその類例を奈良県に求めることができる。その地域は、松井横穴群がある地域と同様に『日本書紀』に土師氏の記載があり、土師氏が葬送に関わっていた可能性を示唆した。最後に、松井横穴群は南山城の複数集落の葬送の場であることを報告した。

題2題では、向日市五塚原古墳の前方部で検出した「斜路状平坦面」は、墳丘を水平に廻るの



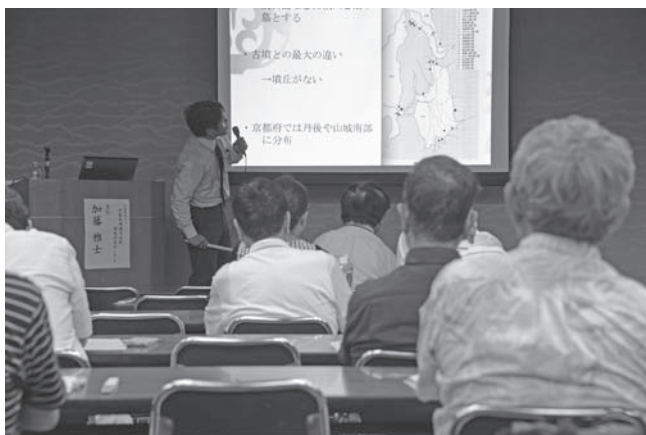
第133回埋蔵文化財セミナー会場風景

ではなく、前方部前端でせり上がる墳形にあわせてせり上がる構築であることを確認した。この形態は、奈良県箸墓古墳と共通していることと五塚原古墳の築造規格が奈良県纏向東田古墳と近似していることから、五塚原古墳の出現に纏向古墳群の造営者集団が関係した可能性を示した。

題3題では、『第30回小さな展覧会』について、特に注目すべき展示について紹介した。

当日は猛暑日ではあったが、乙訓地域だけでなく、京都府内外からも計49名の参加者を得て、無事終了することができた。

セミナー終了後、向日市文化資料館の第30回小さな展覧会場で列品解説を行った。



第133回埋蔵文化財セミナー報告風景

第30回小さな展覧会

平成26・27年度に発掘調査等が実施された事業を中心に、その成果を「京都府内遺跡発掘調査成果速報」として向日市文化資料館にて展示した。また、併せて史跡乙訓古墳群発掘成果展示と平成28年3月にご逝去された当調査研究センター・故上田正昭前理事長の追悼展を行った。8月13日(土)から8月28日(日)の14日間で1,640名の入館者を得た。以下各展示の概要を述べる。

1. 京都府内遺跡発掘調査成果速報

平成26・27年度に京都府内で発掘調査を実施した遺跡の中から21遺跡を紹介した。展示品は約300点である。

21遺跡のうち丹後地域は2遺跡、丹波地域は4遺跡、山城地域は15遺跡である。

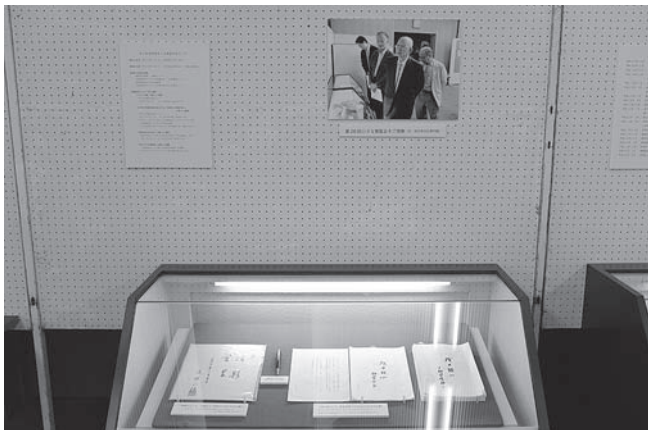
来場者は、京田辺市松井横穴群から出土した耳環が現代まで黄金色に輝く様に驚かれたり、小型の陶棺にどのようにして遺体を納めていたか質問されたりした。



京都府内遺跡発掘調査成果速報展示状況

2. 故上田正昭前理事長追悼展

当調査研究センター・故上田正昭前理事長を偲び、ご遺族からお借りした遺品や先生が執筆された原稿、講義ノートを展示した。



故上田正昭前理事長追悼展展示状況

3. 史跡乙訓古墳群発掘成果展示

平成27年度に桂川右岸の京都市、向日市、長岡京市、大山崎町に分布する11基の古墳が「乙訓古墳群」として国の史跡に指定された。本展覧会では、最新の発掘調査成果を写真パネルで紹介した。



史跡乙訓古墳群発掘成果展示展示状況

菫田野町夏祭り

8月15日(月)に開催された亀岡市の菫田野町夏祭りに、当調査研究センターが同町内において発掘調査中の佐伯遺跡の遺跡紹介・遺物展示を自治会館別館にて実施した。幅広い年齢層の来館があり、地域や出土遺物についての質問がなされた。

関西考古学の日2016

「関西考古学の日」は、全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック13加盟法人が、7月から11月の間に考古学に関連した行事を同時に開催し、埋蔵文化財の大切さを知っていただくための事業である。

当調査研究センターでは、関連事業として8月17日(水)から8月19日(金)にかけて当調査研究センター研修室にて「勾玉をつくろう!」と題し乙訓地域の小学校4年生以上の児童を対象に実施し、159名の参加者を得た。勾玉の起源や向日市文化資料館で開催している「第30回小さな展覧会」において展示している京田辺市松井横穴群出土の耳環を実見した。また、縄文時代から古



勾玉づくり作業風景

墳時代の装飾品の歴史について学習した後、勾玉づくりを体験した。参加者が孔が開いた正方形の滑石に思い思いの勾玉を描き、水中で砥石を使って粗く整形し、目の粗いサンドペーパーで形づくり、水中で目の細かいサンドペーパーにより研磨した。最後は参加児童が好みの色の染料で色づけし、撚り紐に通して持ち帰った。

勾玉づくりを通して昔の文化に触れあう機会となるとともに、「ものづくり」の大変さを体感する機会になった。

(菅博絵)



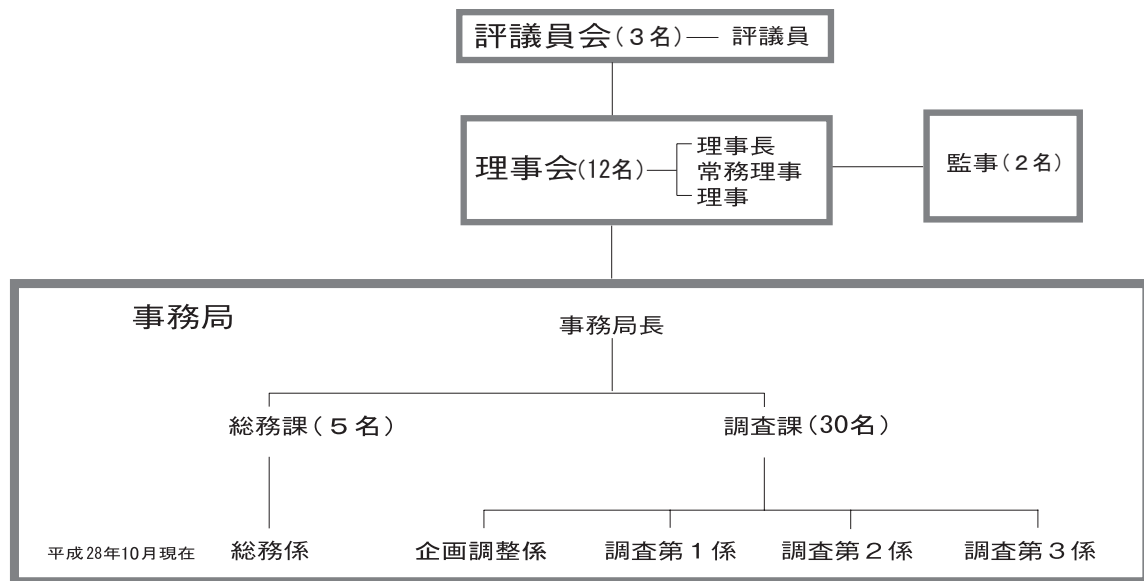
完成した勾玉

「勾玉をつくろう!」参加者内訳

第1講座	8月17日(水)午前	29名
第2講座	8月17日(水)午後	25名
第3講座	8月18日(木)午前	31名
第4講座	8月18日(木)午後	29名
第5講座	8月19日(金)午前	26名
第6講座	8月19日(金)午後	19名

合計159名

平成28年度のセンターの組織



センターの動向 (平成28年3月～平成28年8月)

月	日	事	項
3	1	佐伯遺跡（亀岡市）発掘調査終了	26 東光寺跡（舞鶴市）発掘調査開始
	2	美濃山遺跡（八幡市）発掘調査終了	27 岡田国遺跡（木津川市）発掘調査開始
4	4	女谷・荒坂横穴群第14次、御毛通古墳群第3次（八幡市）発掘調査終了	6 1 監事監査
		芝山遺跡（城陽市）発掘調査終了	4 第132回埋蔵文化財セミナー「京都北部の中世社会」(於：舞鶴市西総合会館 参加者56名)
		岨田遺跡・砂川古墳（宇治田原町）発掘調査終了	6 寺町旧域・法成寺跡（京都市）発掘調査開始
14		第18回理事会（書面にて）	6 9 第20回理事会
17		平安京跡（京都市）発掘調査終了	16 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会（於：鹿児島県）
23		第19回理事会	24 第6回評議会
		長岡京連絡協議会	28 長岡宮第514次（向日市）発掘調査開始
4	4	平安京跡（京都市）発掘調査開始	29 長岡京連絡協議会
	5	女谷・荒坂横穴群（八幡市）発掘調査開始	7 27 長岡京連絡協議会
16		女谷・荒坂横穴群地元小中学生・保護者対象説明会（150名）	28 北大塚古墳（井手町）発掘調査開始
20		長岡京連絡協議会	8 3 文化庁文化財保護行政基礎講座（～5日 於：東京都文化庁）
23		女谷・荒坂横穴群現地説明会（124名）	6 芝山遺跡（城陽市）現地説明会（114名）
25		芝山遺跡東地区（城陽市）発掘調査開始	13 第30回小さな展覧会開催（～28日 1640名）
26		岨田遺跡（宇治田原町）発掘調査開始	15 佐伯遺跡出土品展示（於：蕨田野町夏祭り）
27		平安京跡京都府庁及び京都府警察本部職員対象説明会（307名）	17 関西考古学の日夏休み体験講座「勾玉をつくろう！」（～19日 159名参加）
29		平安京跡（京都市）現地説明会（413名）	20 第133回埋蔵文化財セミナー「近年の発掘調査成果速報～第30回小さな展覧会展示遺跡から～」(於：向日市寺戸公民館 参加者49名)
5	9	佐伯遺跡（亀岡市）発掘調査開始	23 長岡京跡右京第1138次（長岡京市）発掘調査開始
12・13		全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会（於：千葉県）	24 役員協議会
13		女谷・荒坂横穴群（八幡市）発掘調査終了	長岡京連絡協議会
25		長岡京連絡協議会	

編集後記

空は深く澄み渡り、さわやかな季節となりました。ここに『京都府埋蔵文化財情報』第130号が完成いたしましたので、お届けします。ご味読いただければ幸いです。

本号では、昨年度の府内発掘調査成果をとりまとめるとともに今年度の京都府内における埋蔵文化財の調査成果及び普及啓発事業の成果をいち早くお伝えします。

なお、当調査研究センター前理事長・故上田正昭先生を偲び、追悼文を掲載しました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(編集担当 菅 博絵)

京都府埋蔵文化財情報 第130号

平成 28 年 10 月 31 日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒 604 - 0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER